

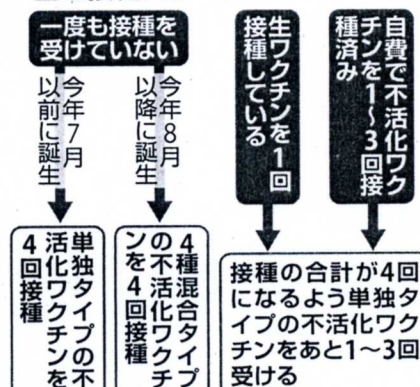
不活化ワクチン接種開始

ポリオ、4回注射に変更

定期予防接種で使われるポリオのワクチンが1日、従来の「生ワクチン」から「不活化ワクチン」に一斉に切り替わった。より安全性が高く、早期導入を求める声に応えたものだが、接種回数が2回から4回となる上、導入されるワクチンは2種類で、想定される主な接種パターンも3通りと複雑になる。

安全向上／回数が増

厚生労働省が想定する主な接種パターン



1日から始まったポリオの不活化ワクチンの接種 (名古屋市名東区で) 一谷之口昭撮影

ポリオは、ポリオウイルスが中枢神経に感染して、手足のまひなどを発症する病気で、「小児マヒ」とも

呼ばれている。予防接種ではこれまで、生きたウイルスを弱らせて作った「生ワクチン」が使用されてきたが、強い免疫が得られる反面、まれに発症する危険性があり、厚生労働省によると、国内では2010年度までの10年間で15人が接種後に手足のまひなどが起きている。

不活化ワクチンは、こうした発症のリスクをなくするため、死んだ病原体から、人が免疫を作るのに必要な成分を取り出して作ったものだ。国際的には「生」から「不活化」への切り替えが進んでおり、国内では

導入が遅れていたが、自費で不活化ワクチンの接種を受ける動きが広がっていた。

不活化ワクチンに切り替わったことで、接種回数は従来の2回から4回に増え、接種方法も口から服用する方式から皮下注射に変わる。これまでは自治体の定期接種で、春と秋に集団で実施されるのが一般的だったが、今後は医療機関で個別に受ける「通年接種」が主流となる。

新しいワクチンは2種類あり、今月導入されるのはポリオだけの「単独タイプ」だが、11月には、ジフテリア、破傷風、百日せきのワクチンと一緒にした「4種混合」が加わる。

乳幼児は受ける予防接種が多く、間隔を空けて接種する必要があるが、接種回数を減らすことができる混合タイプは便利だが、厚生労働省は、すでに生ワクチンを飲み始めたり、自費で不活化ワクチンの接種を受け始めて

いる子供は、単独タイプの接種を早めに行うことを推奨している。

名古屋市名東区の「若葉台クリニック」では1日、さっそく不活化ワクチンの接種が始まった。同市千種区の西田朱実さん(31)は、注射器での接種で大泣きする長男大河ちゃん(2)をあやしながら、「接種回数が増えるのは面倒だが、安全性を考えたら新ワクチンの方がいい」と話していた。